



Title	<紹介> 金智慧著『明治歌舞伎史論：懐古・改良・高尚化』
Author(s)	李, 俊甫
Citation	語文. 2023, 121, p. 58-59
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95427
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

金智慧著『明治歌舞伎史論——懷古・改良・高尚化』

李 俊甫

本書は明治期における歌舞伎の変遷を中心に、三部に分け、「懷古」（江戸歌舞伎の面影）、「改良」（脚本改良の動き）と「高尚化」（古典芸能としての格上げの試み）の三つの観点から論じたものである。以下、本書の内容を具体的に見ていきたい。

第一部「明治期黙阿弥作品における江戸懷古」では、「富士額男女繁山」、「月梅薫朧夜」と「夢物語盧生容画」の三つの作品を取り上げ、脚本創作における黙阿弥の懷古意識を論じた。散切物「富士額男女繁山」と「月梅薫朧夜」は同時代に起きた事件を扱い、従来の研究ではその新しい世相と文物を反映している点のみが注目されてきたが、江戸期歌舞伎の趣向と定型を活用し、江戸情緒を強く残した特色も本書によって明らかにされた。また、活歴物「夢物語盧生容画」における九代目団十郎の改良意識と黙阿弥の懷古趣味の併存を指摘し、そこに反映された相反する明治期歌舞伎の二つの流れを考察した。以上の傾向は、黙阿弥が江戸懷古の意識を持つ観客に意図的に迎合した一種の戦略であった可能性が考えられる。

第二部「明治期歌舞伎の脚本改良」では、狂言作者ではない所謂脚本作者の改良脚本作品を対象にし、彼らの演劇理念と作劇法をそれぞれ明らかにした上で、明治期歌舞伎脚本改良の実態を分

析した。依田学海・川尻宝岑合作作品の場合、創作過程における主客の違いによって創作の姿勢が異なっている。福地桜痴は漸進的かつ現実的な改良方針を取り、近松浄瑠璃を歌舞伎に改作する際に、西洋演劇と日本演劇の長所の融合を図るなどの工夫を用いた。一方、坪内逍遙は人物造型に力を入れ、性格描写において従来の「型」の脱却しようとした意図が読み取れる。脚本作者の脚本創作には彼らそれぞれの演劇理念や理想が反映され、従来の演劇との相違と兼ね合いに眼目があった。

第三部「明治期歌舞伎の高尚化」では、九代目市川団十郎、五代目尾上菊五郎による歌舞伎の格上げ、そして役者没後に行われる追善公演の史的展開に着目し、明治二十年以降歌舞伎が伝統劇として定着する過程を辿った。九代目団十郎が歌舞伎保守化への転向は一般的に明治二十七年新派劇への（完敗）からと言われるが、それよりも早い明治二十年の天覧劇の時期から既に見られることを述べた。また、彼が選定した歌舞伎十八番を意識し、五代目菊五郎は女形を發展させた先代尾上家の芸風を元に、妖怪変化物が多い新古演劇十種を成り立たせた。最終章では追善公演の歴史とその性質の変化を追跡し、その盛衰を歌舞伎界の高尚化と関連付けて論じた。章末の表には、江戸・東京で行われた近世（戦前）における追善公演の記録を整理した。

本書を通じ、明治期歌舞伎の発展の脈絡を把握できるのみならず、作者、役者、興行主と観客などの多様な視点から、「当代劇」から「伝統劇」に変容した歌舞伎の歴史を理解することも可能で

ある。近代歌舞伎に関心のある人にとって不可欠な一冊と言えよう。

(思文閣出版、二〇二三年三月、三二七頁、八、五〇〇円＋税)

(り・しゅんほ 本学大学院博士後期課程)